広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	”絵ばなし”に見る五・六才児の視点
Author(s)	額賀，淳子
Citation	児童の言語生態研究 , 1 : 6 - 13
Issue Date	1968-05-05
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045018
Right	
Relation	

〝絵ばなし〟に見る五・六才児の視点

額賀淳子

㈠のイ

やぎが二匹歩いていたの
ふたりとも橋を渡ったの
「先に行きたい」って一匹のやぎが言ったの
それでもう一匹のやぎも
「先に行きたい」って言ったの
けんかしたの
それで水の中におっこっちゃったの　（六才七か月・女）

☆

あのね　ふたつ木の橋を渡ろうとしたの
もうひとつのも同じにしようと思ったの
「通るんだ」ってけんかはじめたら
おっこっちゃった　（五才十一か月・女）

☆

こっちから大きいやぎかなんか来て
こっちから小っちゃいやぎかなんか来て
ぶつかりそうになったの
それで　ぶつかっちゃって海かなんかに
おっこっちゃったの
この子が本当はこっちで待ってればよかったんだけど…　（六才0か月・女）

☆

橋を渡る時　左からやぎが来て
右からも来て通ろうとして
あっちゃったの
通れなかったの
けんかをしておっこっちゃったんだって
だって細いじゃない
通れないから
「さがって　さがってエ！」
二人で言ったの　（六才七か月・女）

こっちからもこっちからもやぎが来てね　歩いて来たの
「ボクの方が先だよ」
「ぼくの方が先だよ」っていってたの
おっこちたの　（六才三か月・女）

☆

あのねェやぎがね　こっちから
もこっちからも二匹来てね
細い橋だから渡れなくてね
すべって落ちちゃったの
だってさァ　両方一緒に　（六才三か月・女）

☆

あのね、両方からやぎが来てね
角と角とやりっこして、川に落ちちゃった
「俺の方が先に行くからどけ！」って　（五才一〇か月・女）

☆

はじめはこれで　その次は　②
⑧④

やぎとやぎが通るんだって
同じところに橋があって　そこの道しかないんだって
だから　けんかになっちゃったんだって
だから　二人とも川に落っこったんだって　（六才七か月・女）

㈠のロ

あの　ぶつかりあって〝スッテンコ〟
「お前こそどけよ」
「お前こそどけよ」
だってサー　後にバックすればいいのにな　どっちかジャンケンポイで　（六才五か月・男）

☆

やぎとやぎが
「ぼくが先に渡るんだ」ってけんかしちゃって　二匹とも〝ザブン〟と落ちちゃった　（六才十か月・男）

両方いっぺんに渡れないから落ちちゃった　幅を広くすればちゃんと二人渡れる　（六才三か月・男）

☆

やぎがふたつ通ったら
「ぼくが先だ」
「ぼくが先だ」って言ってね
どっちかのやぎがおっこっちゃったの　（五才十一か月・男）

☆

一本橋を　しかが二人いてこう行ったでしょ　こうなるからわたれない
どっちも渡れない　どっちかが川におちるの　（五才十一か月・男）

☆

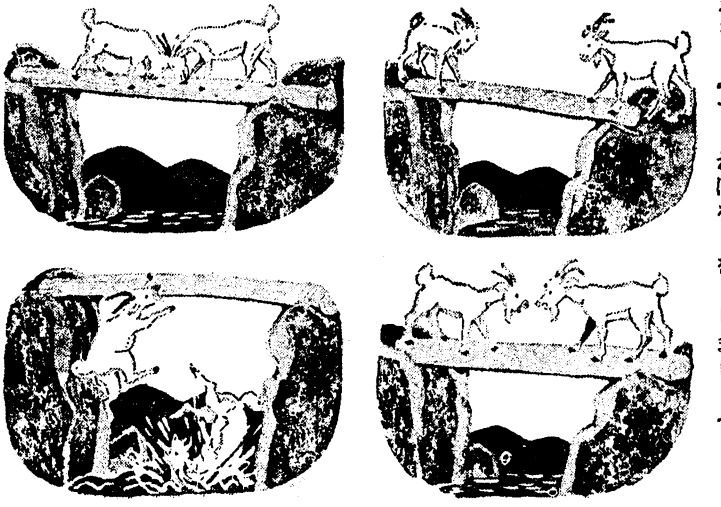
やぎとやぎが丸太んぼの橋を渡って
それで
「ぼくが先に行くんだ」とかそんなこと言っちゃって
それでけんかになって〝ジャボン〟なの　（六才一か月・男）

☆

会ったのかな　そこでやぎが
「ぼくが先だ」
「ぼくが先だ」ってけんかやって
両方ともおっこっちゃったのだ　（六才六か月・男）

☆

えを　みて、おはなしを　しましょう。



〔右教材は、大日本図書・小学校国語教科書一年生用のもの〕

橋が一本だけなのに二匹のやぎが渡ろうと思って両方　ぶつかってけんかになったの

（六才六か月・男）

(一)のハ

やぎがね　橋でね　歩いていたら
もうひとりのやぎがね　又ね
むこうから来てね　話をしてね
水を飲みたいと思って下を向いたらおっこっちゃったの
〔アッ　間違えた、一回!!〕
ふたりとも一緒に来ちゃって
「どいてくれ」「どいてくれ――」
つのでけんかしておっこっちゃったの

（六才一か月・男）

☆

まずね　やぎが来て
にらめっこしてたのね　頭と頭とぶっかってこっちのやぎが落ちちゃったの
〔ちがう〕
通るの　ぶつかっちゃったの
細い橋だから　二本橋をやるのそうすればよかったのに

（六才八か月・女）

(二)のイ

さいしょに言うのこれで
両方のやぎが歩いて来て
「こんにちわ」って言ったところ
何かしゃべっているところ
力くらべしているところ
その時　ちょっとすべって川に落ちちゃった　丸木橋だから

＜　＞

もうちょっとつなげれば
平らな板をやれば

＜　＞

だったら　どっちかが下ってから先に渡してあげたら？

（六才六か月・男）

☆

あのね　やぎとやぎの友達が
にらめっこしてごつんこして落ちちゃった

＜　＞

あんまりずーっとやってたから

＜　＞

足がつかれちゃって

＜　＞

どっちかが　バックしなきゃいけないね

（六才九か月・男）

☆

こっちにいって　やぎ二人が橋を渡ろうとしたの
正面衝突したらごつんこしてはまっちゃったの
丸太がすべって

＜　＞

よく見てなかったからじゃないの？

（六才八か月・男）

☆

木の上に乗ってきて二人会って落ちちゃった　木が細いからでぶっとい橋だったらよかった

＜　＞

すれちがいできると思って通ったんだもん　だって上手でしょやぎは

（六才三か月・男）

☆

これ一番でしょ
いま橋を来るところ
にらめっこ
頭と頭とぶっかって
〝ドボーン〟

＜　＞

ここは一方交通だから一人しか歩けない　木やなんか二本で平べったい木をくっつければ

（六才二か月・男）

☆

橋歩いていたらこっちとこっちと会えたの
もうすこしでごつんこしそうになったの
〝ごつんこ〟しちゃった
〝ぼてん　どしん　じゃぼん〟と入っちゃった

＜　＞

ふたりごつんこしたから
丸い橋でしょ　ひとりじゃだいじょうぶなんだけどね

（六才四か月・男）

☆

一番はじめに橋を渡ってね
途中から下を向いたら　おっこっちゃったの

＜　＞

水のみたいから

（六才〇か月・男）

☆

歩いてたんだよ　そしてね
まん中まで行って下を向いて
〝ダブン!!〟とおっこったんだよ

＜　＞

重いからだよ　二人乗ったから
こっちが重いから、こっちが軽いから
つかまってる
これが木につかまって重いのが
向こうに行って　また　登って

こっちに来る　（六才三か月・男）
☆
おっこったんだよ　これ
けんかしたからだよ
棒の上なんかでやったからだよ
（六才六か月・男）

㈡のロ

これが一番でね
通ろうと思ってけんかしておっ
こっちゃった
ふたりでしょ
＜　＞
☆
橋をやぎが通ってんの
落ちちゃった
ぶっかって落ちちゃった
＜　＞
やぎとやぎが　ちがう方向行っ
たらぶっかった
（五才十か月・男）
☆
橋を渡るところね
両方渡るところね
向かいあってね
こっち側のやぎが落ちちゃって
こっち側のやぎが落ちそうにな
ってつめで橋をおさえているの
＜　＞
向かいあったから
（六才〇か月・男）
☆
やぎは木の橋の上で会ったら
一緒になっちゃって　角でけん
かしちゃって、両方とも　橋か
ら落ちちゃったの
（六才六か月・女）
☆
順番わかった
最初会ったんでしょ
おっこったんでしょ
けんかして
通さないから
他の人がじゃましてたから
橋　細いから　（六才八か月・女）
☆
あのね両方から二人やぎが来た
の
一緒にね二人ねやぎが会ったの
それで　ぶっかっちゃったの
そしたら片方のやぎがおっこっ
ちゃったの
川に
＜　＞
ぶっかっちゃったから
（六才〇か月・女）

㈡のハ

じゅんじゅんにやっておくの？
ちょっとまって
どうして？
何しちゃったの　おっこっちゃ
ってサ
けっとばして落としちゃうボク
（六才四か月・男）
☆
雲があって
橋で
渡ってるの
ふたりが
「アーアッ」っ
ていってるの
ぶっつんこし
てるの
海におっこっ
ちゃったの
＜　＞
ちゃんとつか
まってれば
この人みたい
に
（五才十一か月・女）

問題は感じられるが、思うことを見きわめるために書いているはずだのに、わからなくするために書いているような錯覚に陥る。特別に何かを見つけてやろうなど魂胆は最初から持たなかった。でも、それだけに忠実に子どもに近づこうとする時、わからないことだらけとなってしまう。

まず、子どもの話（データー35枚）をめくっていると、それなりに型が見えて来たことから報告する。それを、㈠のイ、ロ、ハ、㈡のイ、ロ、ハ、と分類してみた。それが先に掲げたものだが、それぞれの分け方に、何の異なりも感じられなければ、その分類は私のひとりよがりな解釈による型分け、ということになる。

私の感じた根拠は、次のようなものに基づく。

㈠は十八枚あって、〝一本橋は二人では渡れない〟ということに、イメージの主眼をおいているもの。少なくとも、子どもの話の中でそう見いだせるものを集めた。やぎの気持ちをセリフにして表現しているものとか、理屈として、そのことを説明している個所から、推察した。

そのうちの

〈イ〉は、四場面をひとつひとつ押えて流れに沿った話しをしているもの、（話し方に、①②③④の区別がつけられるものとか、話す際に指で一場面ずつ指して話したもの）つまり場面場面のつなぎで話が構成されているものを集めた。

これに分類されたのは八人で全部女子。しかし、最後の例なんかは、〈イ〉と〈ロ〉の中間にあるもののようにも思えるし、きちんとはいかない。

〈ロ〉は、全体をスーッと見通しておいてから印象を単発的にまとめて表現した型のものである。だから〈イ〉よりもよほど時間の短い（五秒くらいで回答するのも事実あった）話となる。これも偶然八人あって、それが全部男子。分類の後に、数と性を見てみたらこうなっただけだが。

〈ハ〉は途中から思考の方向が転換している、といっていいのか、イメージの質が変わったといっていいのか、とにかく一回屈折して、ストーリーの本筋といえるべきものにたどりついたと思われる例である。これは二人あって男女一人ずつ。

㈡としては、イソップの言わんとしている本筋に触れていると、はっきりこちらで解せるような箇所の見いだせない回答を集めた。

〈イ〉は、〝一本橋〟などというこ

とには全然無頓着で、四コマの絵から、自分なりのイメージを湧かせ、㈠にあらわれたようなイメージとは、はっきり内容を異にするものだということが回答の中にあらわれているもの。つまり、こちらの意図している〝この絵ばなしは「〜のつもり」〟というものがあるわけだが、そんなことは一向に感じてくれないで方向ちがいのほうに進んで行っているもの。（だからといって、それらの回答を㈠より劣るとする理由は一つもないが、これが学校で取りあげられる場合は、教材への不適応として好い成績はもらえまい。だが本稿での考察は評価についてではなくて、この絵ばなしの持つ「〜のつもり」を子どもたちがどう見定めて行くかを調べることにある。）

〈ロ〉は、場面ごとの見ただけの羅列的な叙述に終わっているよせ集めの報告で、これだけでは、はたして〝橋が一本なのに二人で渡って来てしまったこと〟を〝こまったことだ〟と感じているかどうか察しかねる話しっぷりのもの。四コマの絵の変化に対する解説？　ということだろうか。男子三、女子三、計六人がこれに属した。

〈ハ〉は、落第点をつけられそうな二人だが、場面の写真的設明にあまりこだわりすぎて、そちらに気がまわってしまったため、とても、この絵ばなしの持つ「〜つもり」に思い至るとは考えられない。特に、後者の女の子の例なんか、〝雲があって〟とはじまっている。

計、三十五名（男二十二名、女十三名）の結果が以上であるが、これに名称をつけると、次のようになる。

㈠　**抵抗発見型**
　〈イ〉順次発見型
　〈ロ〉見透し型
　〈ハ〉〈イ〉〈ロ〉複合型

㈡　**平和型**
　〈イ〉自由型（㈠から言えば方向音痴型）
　〈ロ〉見ただけ型（報告型）
　〈ハ〉絵と人との同心型

㈠を抵抗発見型とまとめたのも、仮に、やぎの気持ちをしゃべっている箇所を抜いてみると、

○先に行きたい　先に行きたい
○通るんだ
○さがって　さがってェ
○ボクのほうが先だよ　ボクのほうが先だよ
○俺のほうが行くからどけ
○お前こそどけよ　お前こそどけよ
○ボクが先に渡るんだ
○ボクが先だ　ボクが先だ（2名）
○ボクが先に行くんだ
○どいてくれ　どいてくれ

理屈の通してあるものを抜くと、（質問する前に自発的に出たもの）

○この子が本当はこっちで待ってればよかったんだけど
○そこの道しかないんだって
○二匹来てね　細い橋だから渡れなくてね
○両方いっぺんに渡れないから
○一本ばしを二人いて　こう行ったでしょ
○橋が一本だけなのに二匹のやぎが渡ろうと思って
○細い橋だから

のように、この四コマの絵に仕組まれた難題を、ともかく見て取っていると思うからである。抵抗とか難題とか誇張した言い方になったが、話の筋とかテーマとかいうものも、それを感ずる感じないの差によることだと思われ、電流と抵抗のそれではないが、似たもののように考えたからである。

それに比べ㈡を平和型としたのは、最初の例などが好例で、出発からして「こんにちは」である。こんなに平和なイメージが浮かんでいたら、一本橋は二人のやぎにとっては、一本であることのほうがありがたいことになる。メロドラマの橋じゃないが。次に「何かしゃべっているところ」とある。二人は会いたくて会ったわけで、この子にとっては、「どいてくれ」なんて考えは及びもつかない。「その時ちょっとすべって…」の「ちょっと」は四コマ目の場面転換が、イソップ童話のような比重を持っていないで、あくまで、「うっかり」程度の比重であることを教えてくれよう。でも、何とか、違う見方、違うイメージの広げ方もあるっていうことをついつい気付かせたくなって質問もした。

＜すべらないようにするのにはどうしたらいい＞

すると、もちろん、「退がる」なんてそんな心外な返事はしない。悠々と二人が会えるような橋にすべきだとして

「もうちょっとつなげれば、平らな板をやれば」

と、橋の工事をすることを申し出る始末。こちらはなおもしつこく

＜この橋は、一本きりしかなくて、直すこともできないの。今、こっちのやぎは、あっちに行きたくて、あっちのやぎは、こっちに来たいの。どうしたらいいかしらね＞

なんて、むりやりこちらの方向に向けさせて質問すると、彼は自分のイメージとは関係ないけれども、そういうことで困っているなら、解決は簡単、と言わんばかりに、

「だったら、どっちかが退がってから、先に渡してあげたら」

と、いとも涼しい顔で、全くの他所事。この〝だったら〟には本当にショックであった。何のことはない。完全な肩すかしと言うほかない。このあたりで、こちらがもう少し考えねばならぬことだったが、次々と屈辱を重ねていたことになる。

「やぎとやぎの友達がにらめっこして、ごつんこして落ちちゃった」

少し可能性があると思うから、

〈どうして落ちちゃったの〉

と聞く。ここで〝橋が一本きりしかないから〟と言ってくれればいいものを、

「あんまり、ずーっとやってたから」

と、イメージ転換はおろか、イメージのご念の入ったこと。

〈どうしてずーっとやってたの〉

〝そんなことやぎたちに聞いてみなけりゃわからない〟とでも言いたそうな顔をして、しばらく黙っていてから、

「足がつかれちゃって」

と返事する。進退きわまって、先の能なしの質問をせざるを得なくなる。すると、またこの子も、

「どっちかがバックしなきゃいけないね」

と、同情的に教えてくれた。〝いけないね〟なんて穏やかな顔して言うくらいだから、一本橋の真中まで、わざわざ出かけて来て、やぎとやぎの友だちが、アップアップとにらめっこすることだって考えられる。このタイプはまだあった。

本来、二人(匹)のやぎが会えちゃ、本当はこまるわけだが、のんきに、

「こっちとこっちと会えたの」と始める。さっきの〝こんにちは〟にしろ、〝友だち〟にしろ、〝会えたの〟にしろ、このように友好的なイメージからは、現代のラッシュ電車の醜さを想わせる〝われ先に〟のあさましさを笑うイソップの真意など程遠いと言わねばなるまい。でも何でもかでも、経験の有無に帰そうと言っているのではない。すでに述べたように知っているのだから。ただ、それがこれらの子の関心の的にはならないということである。

ただし、この自由型の中には無責任型も含まれる。

「丸太がすべってはまった」

など言うものだから、これだけでは舌たらずの回答で歯がゆく思われてつい〝どこまでわかって言っているのだろう〟という気になる。

〈どうしてはまったの〉

と聞き返すと、

「よく見てなかったからじゃないの?」相手が大人ならば怒り出してもいいところだろう。またこんな例がある。絵の順序に従い、とにかく落っこちた。

〈どうして落っこちたの〉

と、聞かれて、そこで初めて考える。

「水のみたいから」

最初にその子が話し始めたことと少しつじつまが合わないが、本人はケロリとしている。こちらもケロリとして、またたずねる。

〈落っこちないようにするのにはどうしたらいい〉

こんどは自分のイメージの中から方法を見つける。

「岩につかまって、すべっておりていくの」

……なるほど? 川に落っこちるのは不本意としても、川に降りることは絶対に必要なわけである。無責任型など名付けるほうこそよっぽど無責任であって、この子の自分への忠実さに胸打たれる。その他、いろいろ勝手極まるものがあるが、その子どもの側から見れば、みな自分のイメージに忠実のあまり、自分の関心を確保して譲歩しないということでもある。先の「よく見てなかったからじゃないの?」にしても、その子の関心の外と思えばこそに違いない。

㈠では橋が一本しかないのに、二人がゆずらないで遂に喧嘩に及んだ——つまり喧嘩は手段であるが、㈡の〈イ〉であらわれる喧嘩はそれが目的となっている。

「けんかしたからだよ」

「棒の上なんかでやったからだよ」と、〝わざわざ不安定な棒の上でサーカスみたいな喧嘩をやらずとも、もっと広々としたところですればいいのに〟とでも言いたいのかもしれない。

以上は、ずいぶん手こずらされた回答の例であるが、㈡の〈ロ〉よりか質がいいと思う。なぜなら、〈ロ〉のほうはつかみどころがなくて、こちらの質問を上手に食って一応マトを得た結論は出しているわけだが、〈イ〉のように個性がないというか、〈イ〉は方向音痴であるけれども、それなりに堂々と自分のイメージを築

いている。しかし〈ロ〉は、回答からそれを話す子どもの気分が察せられない。たとえばこんなふうに。

「さいしょ会ったんでしょ」

「おっこったんでしょ」

〈どうしておっこったの〉

「けんかして」

〈どうして喧嘩したの〉

「通さないから」

〈どうして通さないの〉

「他の人が邪魔したから」

〈どうして邪魔したの〉

「橋、細いから」

〈じゃ、おっこちないようにするのにはどうしたらいいの〉

「ひとり後にいて、前にいた人が先に行って、前にいた人のほうに行くんだったら、この人が前に行く」

こちらは、このように必死で最後の対策案まで聞き出そうと質問しているのに、〝もし、そういう必要があるならば聞かせてあげてもいい〟程度の無感動さぶりである。この材料を使うとき、絵ばなしだから、できるだけ、パッと一枚の四コマ切れの絵を黙って見せて、こちらは何も言わず、子どもの発言に任かせようと心がけた。だから、どれの絵からどの絵につながるかも、子どもに考えさせたし、途中で口をはさむようなことはしなかったつもりだが、これだけは例外で、一番多く質問したし、そうしないと中味が聞き出せなかった。

どの子どもにもした質問は、

「どうすればよかったか」ということだけである。これは㈠の子にも発した。この質問が、すぐ、一人ずつ渡るという答えを生むものではない。というのは、橋を二本架けるとか、橋を改修して、二人仲好くいっぺんに渡ろうとする子や、目的地が反対方向というその前提すら崩してしまって、AのやぎにBのやぎがついて行く、一列に並んで同じ目的地に行くようにしてしまう子もいるからである。だがそうなると、どうしても、次の質問をしたくなる。前にも書いた、

〈この橋は一本きりしかなくて、今はなおせないの。こっちのやぎは、あっちに行きたくて、あっちのやぎは、こっちに来たいと思っているんだけど、どうしたらいいかしら〉

ここまで質問すれば、必ずバックしてひとりずつ渡るとする意味のことを言う。こう質問されて、この答えの出なかった子どもは、ひとりもいない。

ただ、㈠の子と、㈡の子で違うのは、㈠の回答をしている子どもは、〝待ってました〟とばかりにこの質問に答えて安心顔になるが、㈡のほうの子たちは、他人ごとのように答える。何となく、そう問われてみれば、答えはこれしかないけど、はて、そんな質問が、今この際、関係があるのかというようなふうを示す。せっかく、対策を導き出してあげたのに、また、本人そう答えているのに、なにも満足そうな顔に変わってくれないのである。

さて、この㈡の平和型は、この質問の答えを質問以前に知っていたのか知らなかったのかに注がれていたこちらの関心も大きくこの辺で方向転換を始めるようである。なぜなら知っていた知らなかったを、この質問とこの回答によって得ようとする愚かさにうすうす気が付いてきたのである。いったい、知る知らないというのは、その対象を自己が所有しているか所有していないかということと考えられるが、先のように、決して誘導訊問したつもりでもなかったが、結果的には、論理的に畳み込んで質問して行くと、答がはじき出されてくる。本人はそれが答だとも対策だとも思っていないのに、ことばの上では出ている。しかしそれで、知った、知っていたと言えるかどうか。ことばの上では、知る知らないは、その対象を自己が所有するか否かなどと言えるけれども、やはり、発見という感動を伴わねば承知できないものらしいのである。女性の特有語〝シラナイ〟を思い出したが、あれは確かに認識に関する用語ではなく、感情用語であろう。そして、自分と相手との同関心からの脱出、あるいは相手の関心に対する拒否を示す用語だと思う。つまり、この㈡の平和型において、知る知らないは、こちらの質問による回答によって出る出ないではなくて、すでに、関心の向けられ方、据え方によって求められるものであったと考えられて来たのである。平和型などと名づけたのも、絵ばなしをさせておいて、何かを見ようとしたり、その四コマの絵に何かを仕掛けておいて、何かを試そうとしているのに、まことに平和そのもののタイプという意味であった。

ところで、その関心が、関心あるところに（本題の場合、示された絵の〝つもり〟）向けられるか向けられないかの問題はどう考えるべきであろうか。

こんな面倒なことを言わせるのも、㈠抵抗発見型の〈ハ〉〈イ〉〈ロ〉複

合型）の事例からで、〈ハ〉の例は、出だしのイメージをそのまま進めていけば、㈡平和型の分類に属する運命にあったが、突如として、

「アッ間違えた！　一回」

という発言があり、これから察するところ、イメージの転換があったために、㈠抵抗発見型に入る権利を得たことになる。彼自身が何の助言も誘導もなしに、示された絵の関心あるところに、彼の関心が呼び起こされたのである。このイメージ転換、あるいは焦点設定をもたらすものはいったい何か。

同教科書学習指導書も読んでみた。

「短文のつみかさねで、話をするくせをつける」

「一つの場面についてわかったことを一つずつ話させる」

「各場面ごとにくわしく話させる」

「四つの絵について何がどうしているかをつかませる」

「全体をつなげてすぐわかるようにする」（傍線筆者。同書五十二頁）

けれども、〝何がどうしているか〟とか場面の切れ切れの寄せ集めで、それをつなげれば、全体になり、期待したものに合致するというようなものでないことは、先述した通りである。この方法では㈡の平和型を出すばかりであろう。

ただ、

〝評価は、話をするのに興味を持ったかを観察〟

とあるのが救いで、また、指導上の留意点は、

〝とにかく、話をする子には、いちいちほめてやることである〟

とあるのを見ても、そういうことでよいのかとも思ったりしたが、小学校ならぬ幼稚園で、しかも四時間の配当を持つものを、たいていの子どもは、五分もあれば片付くし、それ以上に引き延ばすことは、大変骨の折れることであろうと感心したり、疑問に思ったりした。五秒以内の子も、三、四人はいたのだから。結局、指導書からは得るところがなかったが、考えてみると本稿でとり上げていることは、この材料の教材的価値の是非論ではなく、その該当年令の引き下げを言おうためでもない。お話しをするために用意された材料に違いないし、指導書にもそのための指導方法が書いてあるけれども、一番大事なことは、**〝お話〟そのものについて、子どもたちがどう考えているか**――このことが、大勢を決していると言ってはいけないのであろうか。

㈠抵抗発見型の〈ロ〉見透し型が、

「作りばなしでもいいの？」

と確かめていることを注意したい。仮想を立てることを知っている子が正解答を得ているということである。他の㈠抵抗発見型の〈イ〉順次発見型にしても、語尾に、

「～（だったん）だって」

の〝だって〟を必ずつけて話す子どもが出て来ている。感覚的な言い方が許されるなら、〝～（だったん）だって〟と仮想するから、イメージは円弧を描いてふくらんでいく。ふくらみは、その中心を示唆することがあるのだろうか。

それと反対に、語尾に、

「～しているところ」の〝ところ〟を必ずつける子どもは、（㈡平和型の〈イ〉自由型〈ロ〉見ただけ型に見られる）どうしたって、イメージはふとっていかない。ことば数はふえても断片に切り離されている。

「～しているところ」というのも一つの話し方とも言えるが、㈠の抵抗発見型の子どもが、仮想を押し立てることによって、四コマの絵を素材化する時、話しが成立するのに比べ、この方は、四コマの絵に追随する五場となっているから〝説明〟は生まれても、話しとはなっていかない。つまり、どんな内容に話をさせるかは、その内容の指導によって得られるとする常識よりも、その話しする姿勢や構え方が決定性を持つと言えようか。

更にこの外廓的姿勢や構えの問題は、連想の性質にも見いだされる。

順調に連想が進んで、ある所で、ぷつりと阻止されたとき、次にどんな連想の方向を見いだすか、この絵ばなしの例で言えば、仕組まれたポイント、すなわち特殊な事件として、それを見なければならぬ連想に加えられた抵抗、あるいは連想の隘路とも言うべき状況下で、子どもがどう対処するかという問題でもあった。ところが、子どもたちは、連想の隘路ならぬ丸木橋上の二匹のやぎに対しても即座に逆進、転進を命ずることをしない。たいてい、まず〝橋が太けりゃよかった〟とか、〝二本あれば〟とか、とにかくその場面（やぎが二人角をつき合わせている）を変化させないで、間に合わせてしまう。それはちょうど自分の連想の流れに変更をもたらせるのを払うごとくに。

きわどいところのものでも、〝一人がそこにしゃがんでまたいで通

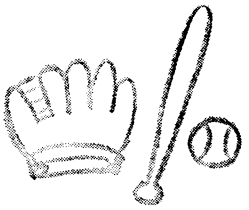
る〃とか、〃はじっこによる〃とか、〃軽いほうが橋につるさがって重いほうが行ってから、また登ってきて渡る〃という意味のものが多い。もどるよりも橋の方を変えてしまうというんだからおもしろいが、おもしろがることではなくて、姿勢や構えの単一性として見ることであろう。〃引き返す〃とか〃もどる〃という考え方はいつごろからどう育って行くものなのであろうか。

せいぜい、少しもどっている考えのもので、

「ひとりだったらよかったんだけどね」

程度の述懐がある。だが、この例は、案外思考の逆進、転進が、やっぱり順調に前進できないとする嗟嘆の後に、あらわれることを暗示しているのかもしれない。少なくとも崩れかかった構えの単一性にしがみついている感じが私にはする。

（ゆかり文化幼稚園教諭）



◇入会の御案内と投稿規定◇

本誌は、幼稚園・小学校の現場人が現場でつくる雑誌ですから、幼・小の先生方ならどなたでも正会員となれます。

現場での御報告・御研究をお寄せ下さい。四〇〇字詰二十五枚以内。ただし、子ども中心のものであるのが本誌の特徴です。採否は編集部にお任せ願います。

ほかに研究会その他を計画致します。

本誌購読者の方々（一年分まとめ）を会友になって頂きますが、原稿掲載は正会員に限ります。

入会御希望の方は

① 芳　名
② 御 住 所
③ 勤 務 先
④ 担当学年
⑤ 本年度使用の国語教科書使用出版社名

を必ずお書き下さり、本年度会費（千円）を添えてお申し込み下さい。

（事務局）

次号予告

［秋季刊］

特集 ―子どもは、〃場〃をどう把えて行くのか―

■〃場〃の理論と子どもたち（仮題）　都立大学助手　岡田紀子

■現場の調査と報告

■〔座談会〕子どもの夢を作る
円谷プロダクション　金城哲夫
シナリオライター　郷右近タエ
子どもの光編集　旗手康人
東京少年劇団演出

■創刊号合評会記事

サカホーン
カラーハーモニカ は
これからの教育用
ハーモニカです

製造・発売元
日本教育楽器
東京都港区芝土手跡町 4～1
TEL (431) 1631(代)